

時事新報

第三千七百八十八號
 明治廿六年七月廿七日 木曜日
 舊曆癸巳六月十五日 (乙丑)
 日出版四時四十分
 月出版六時四十分
 年出版四時四十分
 通年出版四時四十分
 (西曆一千八百九十三年)

時事新報定價

時事新報は毎號八面乃至十二面にして詳細なる商況物價の報告あり其代價運送料は左の如し
 一號 貳錢五厘〇一ヶ月 前金五拾錢〇三ヶ月 前金壹圓四拾五錢〇六ヶ月 前金貳圓八拾五錢〇一年 前金五圓六拾錢〇月曜日休刊(此他大祭祝日年始年末等一切休刊セズ)

時事新報運送料

- 一 日本國內並に朝鮮國京城、仁川、釜山、元山、津浦、南亞米利加、中央亞米利加、布哇諸島、米國若くは加奈陀を經て郵送する歐洲各國 一ヶ月 金六拾錢
- 二 北米合衆國、英領加奈陀 一ヶ月 金三拾錢
- 三 香港を經て郵送する亞細亞諸港、太平洋諸島、露領滿洲、清國諸港 一ヶ月 金六拾五錢
- 四 露領滿洲、清國諸港 一ヶ月 金三拾五錢

時事新報廣告料(前定)

一行五號字廿四行時一日限一頁以上七日以上
 一行 一付十三號一錢十錢五厘

本社(寄稿)に付

東京府下を始め各府縣に通信社なるものありて是より各新聞社に報道を發送し各新聞社は之を受けて紙面を填寫するより各社同一の記事を掲ぐるものと寡からず獨り時事新報社は社員並に通信員の多きを以て斯類の社に通信を依頼せずと雖も世間往々此事を知らずして通信社にさへ報道すれば本社にも其報道は達する事と信する方多きが如し爲めに行違ひを生じたる場合も寡からざれば本社に記事論説を寄稿せんとする方は直接に本社に向て發送あらんとを請ふ

時事新報社ニ送タル投書ノ原稿ハ凡テ寄稿者ニ返ヘサズ又本社ニ保存セズ

時事新報

株熱の餘症恐る可し

近日諸會社の景氣は次第に上進して株式賣買の價値のみならず其取引も中々盛なるが如し金融緩曼と稱する今日に於ては自然の勢なる可しと雖も凡う人事は極端に走り易きの常にして資産に餘裕ある人が銀行などへ金を預けても其利子の割合甚だ低くして面白からず左ればとて他に資金の用法もなければ先づ會社の株券にても所有せんとて漸く其邊に着目する折柄、經濟社會の人氣は極めて留む可らず即ち價の暴騰を致したる所以なり物價の昇降は人氣の如何に由るものとすれば株式の暴騰も人氣の然らしむる所なりとて取て怪しむに足らず又假令暴騰したればとて富豪大家の計算を以て永遠の利益を見込み恰も其株式を世襲財産として私有すれば毫も妨なきのみか真に世襲の名に相應するものもある可しと雖も愛に經濟社會の動靜の爲めは不可しは諸會社の株券として投資者流の玩弄物たりしむるの一事なり元來株券の價は其會社の基礎の確

なる不確なるを其配分利益の多きと少きとを觀察し之を標準にして始めて定まるべきなりと市價昇進の勢を成すときは時として其標準の在る所を忘れ上々進んで止まるべきを知らざるの事例なきに非ず例へば今の鐵道株にても其株の時價と配分利益との割合とを念入れて計算したらば一年の金利僅に二分以上三分に達するものも少なき程の次第なるに市場の實際に之を買ふ者の多きも不思議なれ況んや諸會社中に其基礎も固からず標々に彌縫して計算を作り會社に屬する不動産なきを物價騰貴の今の相場に積り或は物品の未だ賣れざるものを現金と視做す等様々の工風を運らして外面を装ひ兎角して營業費を少なくし配分益を多くして人氣を引き以て株の價格を維持せんとするものさへあるに於てをや斯る内情を知りながら其會社の株を買ふとは益々不思議なりと云ふ可し或は目下の利益は多からずとも又は社中の現狀に多少の不都合あるも將來に見込みあるが故にと云へば自から一理なれども是れは永遠の利益に着眼する富豪大家の事なり然るに今日の實際には左まで資産もなき人々が身分不相應の株券を所有して曾て不安心の様子なきのみか尙ほ進んで買はんとする者多きは何ぞや他なし其れを買ふは之を賣らんが爲めのみ今日右より買ふて明日左に賣り其買買の間に利する所あればなり唯人々の度賢次第にて買持の時に長短あり其金高に多少ありと雖も之を要するに賣るが爲めに買ふの目的に至りては則ち一なり株券の價にして既に其標準たる會社の基礎配分の利益如何を問はず唯人氣に從て昇進とあれば亦是れ流行の鬼か萬年青の一種にして甲乙丙丁轉々賣買の間、不圖したる拍子の機に人氣去り流行止むときは夫れを由々しき騒動なれ其時機の未だ到らざるに先だち皆く賣抜けたる者は高運なれども最終に至りて誰れか災厄を負擔する者なきを得ず時價膨脹の時に當りて所有の株券幾百幾千正に何十萬圓の大富豪と自ら信じ人も亦許したるものが今は則ち收縮して自から身邊の淋しさを覺ゆるのみならず素より身分不相應の品を買持するが爲めには所謂頭金を附して抵當に差入れたるものも多ければ金主は頻りに増抵當を促して義務は之に應ずるを得ず双方共に非運に陥りて空しく既往の狂夢を嘆息するの日ある可し般般遠からず明治二十三年の頃に在り我輩の掛念する所なり(官設鐵道論より遂に今の鐵道會議に至りし其起原を記述する者は當時の事情を知るに難からざる可し)但し經濟社會の事は容易に斷言す可きものにあらず今日諸會社の景氣は果して實に過ぎ其株の賣買も既に狂して在るの病名を下す可きものか或は未だ然らずして今後尙ほ一層の甚だしきに至り始めて大に破裂す可きや或は昨今の有様を頂上として徐々に退き自から調理して無事太平に歸す可きや我輩の知る可き限りにあらずれども兎に角に事の常ならざるは經濟論者の敢て許す所なれば實業社會先達の士人は萬般に注意して人の狂奔を止め前年の慘狀を

再演する事なからしめんが爲め豫防の策を講ずるも肝要なる可し或は政府の政策を以て云々の説もなきにあらざれども商人の利に熱するは其人の私事にして政令の達す可き區域に非ず唯此處は有力なる實業界の先輩が私に事の利害を説き或は自家の經驗に照らして德義上に之を警め又或は金融取引上に於て暗々裡に之を抑制する等臨機の處置ある可きのみ凡そ其社會の先輩には自から先輩の榮譽あり我輩は其人の榮譽に訴へて其社會の平和を維持せんことを斷るものなり

雜報

獨逸國通信(六月六日發)(前號の續)

獨逸保守黨 雲 莊 生

は其名の示す處の如く純然たる保守主義の政黨なり千八百七十六年より國會に於て始めて今の黨名を稱す黨員の多數は大地主及貴族より成り民權の伸張を喜ばず益々政府の權力の増大を希圖し細民の負擔は如何に嵩むも毫も顧る所無く只管ら獨逸の國防のみを以てせんことを望むが故に軍備の擴張、租税の増徴等には毎度奮て賛成す彼等は曾て言論の自由を制限せんことを企て時に烟草の政府專賣案にも同意し殖民地政略を盛んにせんことを議し其他寺院の建築、波蘭人取締條例、社會黨鎮壓令、議員の在職年限の延長、火酒の増税の如きは此黨員の好んで迎ふる所なり從來は自由貿易を主張せるに拘らず中頃より説を變じてビスマルクの保護稅策に同意せり去彼等は一も二も無く政府に味方するにあらざり政府若し少しく棍を進歩の方位に向くるときは頑然之れと抗争するも又現に黨員の一部は曾てビスマルクの在職間に其政敵となりしものとあり爲めに宣言書中に政府と斷然從來の關係を絶つことを明言せるもなほありしが今日に至る迄依然政府黨若くは王家黨たるの事實は到底掩蔽す可らざるなり、ビスマルク職を去りて後黨勢稍く振はす然れども猶獨逸國會には六十六人の議員を出し普瀋西の下院には百二十五人の議員を有する一大政黨なり黨中には華胄の名士夥からず伯爵ミルバツハの如き男爵マントイフェルの如きフアンヘルドルフの如き其幹々たるものなり黨の機關新聞をクロイツツァイトングと云ひ伯林に於て發行し文章の道勁を以て鳴る

獨逸國會

一名保守黨自由派と云ふ其把る所の主義に於ては獨逸保守黨と大差ある事無し黨中に貴族の外、政府の顧問に居る官吏多きを以て又た貴族黨の名あり其始めて起るや左右兩黨の中間に立ちて専ら調和を計らんとする意を以て組織せるが遂に其目的を達する能はず中頃よりビスマルクの股肱となりて働きたる其意を奉じて國民自由黨を説き聯合派の一に加はらしめたり是れ世間より使節黨の聲名を得たる所以なり以前より獨逸保守黨の統一に就ては頗る勢力周旋する所ありしが昔佛の戰勝して其業成りし後には較重死して走狗索らるる響に洩れず次第に勢力を失ひ最後の國會には僅々十九名の代議士を有せるのみ政治上及經濟上の問題に於ては始終獨逸保守黨と同一の運動をなせり唯だ昨年春普瀋西下院に於て小學校條例の討論に際し兩黨の意見相反せしむとありしのみ從來兩黨合併の議起りたれども種々の關係ありて今日迄其議斷らず男爵ツエドリック

地方通

○函館の合併相模
 坂の合併相模は四日大日平は大坂方の入りに小松山も亦同力十取組は水を入れて豊寄切て大戸の勝とな